H24.11.17

治療の効果は？

Dr. 和の町医者日記

「抗がん剤」シリーズ②

抗がん剤を教えてくれた患者さん

抗がん剤という治療法は、がんに本当に効くのか？ どのくらい効くのか？ こんな素朴な疑問があるでしょう。

私の経験では、効くがんと効かないがんがあります。その効きやすさは「感受性」とも言います。また同じがんでも時期によって効き方が違ってきます。最初は効いたけれど、やがて効きにくくなった。これを「耐性」といいます。細菌に使う抗生物質も長期間使っていると、だんだん効かなくなるのと似ています。

私と抗がん剤の出会いは27年前でした。私は医者になって1年目から抗がん剤を使いました。半年もしないうちに白血病の患者さんの主治医になりました。大学病院に緊急入院できない患者さんが送られてきました。

大みそかに入院してきた患者さんは、私と同じ年でした。歯茎からの出血が止まらないとのことで、近くの医者が採血。異常を指摘され、白血病の診断がついた状態で大学病院を経由して紹介されてきました。

顔色は真っ青で、口の中には点状出血がたくさんありました。血小板が5千しかない！ 通常は、20～30万です。すぐに血小板の輸血が必要ですが、年末年始で血液製剤が足りません。元旦から、家族を連れて血液センターに採血に行きました。

こうして集めたものを輸血しました。赤血球や血小板の輸血で、正月明けには全身状態が少し安定しました。そこから抗がん剤治療を開始。その患者さんには抗がん剤という選択肢しかありませんでした。

白血病は抗がん剤が効くがんとして知られています。連日、先輩専門医の指示に従い、点滴と内服を組み合わせ、抗がん剤を投与しました。それが当時の標準治療でした。

しかし、その若い患者さんは再び、食べられなくなり衰弱しました。もちろん栄養補給の点滴も並行して行いました。先輩から教えられたメニュー通りの抗がん剤を投与しました。2～3週間後には、貧血になり頭の毛が抜け落ちて、どんどん衰弱していきました。

定期的な骨髄検査で抗がん剤の効果を評価しました。骨髄検査は胸骨や腸骨に太い針を刺して骨髄液を採取します。一瞬、痛い検査です。当時、私は数人の白血病患者さんを受け持っており、毎日、骨髄検査を行っていましたので、この手技がうまくなりました。

しかし、その患者さんには残念ながら、抗がん剤はあまり効いていない印象でした。骨髄検査からみても、腕からの採血所見からみても効いていないのは明らかでした。

その患者さんは一度も落ち着いた病状を得ることなく、結局3カ月後の早朝、静かに旅立たれました。亡くなられる3時間前に、大量に吐血されました。焦って薄暗い部屋で一生懸命に輸血をしました。点滴では間に合わないので、注射器で血液を押して入れました。

そうしている最中に呼吸が止まりました。気がつけば思わず馬乗りになり、心臓マッサージをしていました。両親に死亡宣告をしながら、私も泣いていました。

抗がん剤というものがどんなものであるのかを、医師になって初めてその患者さんに教えていただきました。抗がん剤は、人を衰弱させ、髪の毛が抜けることを知ったのです。その患者さんのことは一生忘れません。もし今、生きておられたら私と同じ年のおじさんです。

白血病 血液のがん。急性骨髄性、急性リンパ球性、慢性骨髄性などいくつかの種類に分かれる。それぞれで治療法が異なり、治療成績や骨髄移植ができるかどうかも違う。一方、胃がんや肺がんは、固形がんと呼ばれる。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。労働衛生コンサルタント。関西国際大学客員教授。54歳。ブログ（http：／／www.nagaoclinic.or.jp／doctorblog／nagao／）が好評。

ひょうご